

東京工大クロニクル

No.79

MAR., 1976

主 要 記 事

ドイツ精神史の一駒	1
原子炉工学研究所長に就任して	2
停年退官にあたって	3
人事異動	8

ドイツ精神史の一駒



— 異種文化との接触 —

八 木 誠

豊かな文化的伝統を負う民族にとって、異種文化との接触は、深い傷痕を残すものであり、屢々民族存亡の問題にすらなり得るものである。それは我が国においては甚だドラスティックな形をとった。十六世紀中葉以来の西欧文化との接触に対する反応は結局十七世紀（1639）の鎖国令であり、十九世紀の開国は明治の体制変革の引き金となり、今世紀における太平洋戦争も、我が国における資本主義の発展と深くかかわるにしても、欧米文化に対する国粹主義の主張という面を看過することは出来ない。

西欧にとって、非西欧諸国との接触は、西欧側が強者の地位に立っていたために、一見文化的危機の状況を惹き起さなかったように見える。しかし少し立ち入ってみると、必ずしもそうではない。いまこれがドイツ精神史に落した影を一瞥してみよう。それは西欧全体への眺望の窓口ともなる。というのは、近代西欧の政治がフランスに、経済がイギリスに代表されるとすれば、思想はドイツに代表されると言い得るところがあるからである。

非西欧諸国に宣教師を派遣した近代西欧は、彼等の報告によって、キリスト教という宗教形態が決して唯一独特のものではないことを知るようになった。現代の我が国は宗教のことなど眼中にないから推察は容易ではないかも知れないが、これら近代西欧の自己意識にとってはなかなか大変なことだったのである。かつて我が国において天皇は民族的伝統の中心であった。勿論我が国における天皇制と西欧におけるキリスト教を一概に同一視することは出来ないが、キリスト教が西欧文化のいわば心の支えであった点において、我が国における天皇制と類比がないわけではない。さて異種文明と接触した際にとられる態度は、拒否反応を起して殻に閉じこもるか（鎖国）、伝統を棄てて相手方に

同化するか（開国以来の我が国にはこの傾向が強い）、相手を単純に無視するか、相手方との対話・対決を通して自己の伝統をより新しく深いものへと革新するすなわである（異種文化との接触の問題はトインビーの文明史論に詳しい）。西欧の場合は相手を無視して自己を主張する傾向が強いのだが、その態度・反応の仕方はやはり単純ではない。非西欧の諸宗教の知識は、十九世紀に比較宗教学を生むのである。その代表者はサンスクリットの研究から宗教学建設へと向かったM・ミュラー（1823～1900）であろう。こうして知見が増大するにつれて、唯一神教も救済者も宗教的倫理・思想も、キリスト教の専有ではないことが明らかとなった。こうした事実はやがて思想家・神学者の問題となった。十九世紀のドイツ神学の関心は、あらゆる宗教に通ずる本質は何か、それはいかにキリスト教に典型的に表現されているか、ということであり、神学部の講義は屢々文学部の哲学・宗教学の講義と区別出来ないほどであった。こうした状況の中でキリスト教の絶対性の問題をかかえて苦闘したE・トレルチ（1865～1923）は、キリスト教の歴史的相対性を遂に認めざるをえなかったのであった。

たとえばキリスト教と仏教のように独立して成立・展開した宗教が、表現形式において異っているにせよ、結局のところ同じ内容を持つとしたら、それはとりも直さず却って宗教の普遍性と真実性の保証になると我々は考え易いし、そう考えるのは自然である。しかし西欧近代では、それはキリスト教的西欧の否定を意味すると受け取られた。こうして今世紀に、十九世紀神学に対抗してあらわれた神学的立場は、キリスト教の絶対性を立てる方向に向かった。そこには一方では他宗教との接触の問題があり、他方では西欧近代の中であらわれた「異種」文化、つまり自然科学というより人文科学・社会科学の中で起って来たキリスト教批判の問題があったのである。

上記の方向の代表的神学者はスイス（ドイツ語圏）の神学者カーハ・バルトであった。我々は、キリスト教史全体を見渡した上で宗教改革者のキリスト教を主張し直した彼の業績、またナチに対して果敢な思想闘争を行った彼の努力を低く評価することは出来ない。しかし彼の考え方に、人文科学的な宗教研究に対する反動の性格があったこともやはり否定出来ないと思われる。たとえば彼は、畢生の大著「教会教義学」——10,000ページ近い——の序説(序言)において我が国の浄土仏教に言及する。そして特に親鸞の宗教が宗教改革者のキリスト教と甚だ近いことを認めるのである。この際彼は一応キリスト教が浄土真宗に勝る所を以、かなり不当な仕方ではあるが、これは彼の持つ情報の不備にもよることであり、彼自身もこのような差異は大した意味を持たない、という。そして彼は、キリスト教のキリスト教たる所以は信仰の生のあり方ではなく、キリスト教がナザレのイエスのみを救世主(キリスト)として信仰するところにあり、イエスが救世主(キリスト)であることのみが真理であり宗教の真理の根拠なのだ、だからイエスを信じ告白するのではない浄土仏教はやはり偽りの宗教だと断定するのである。そしてバルトが近代的なキリスト教批判に対してとる態度もこれと等しい。彼は聖書以外のなにものをも、宗教の真理の基準としては認めようとしないのである。無論そこからの批判をも取り上げることが出来ない。

我々はこうしたバルトの態度に驚いたり憤慨したり

する前に、ここに近代西欧の精神的苦悩の表現を見るべきであろう。実際、バルトの神学は西欧に深い共感を呼び起し、今世紀半ばまでプロテスタント神学を支配していたのであった。しかしこのような精神的鎖国は永く維持出来るものではなかった。それは就中、聖書の歴史学的研究が、聖書的なものの見方はやはり当時の時代特有の考え方に規定されていて、そのまま現代に通用するものではないことを明らかにしたからであった。そしてこれらの研究を推進したのも、今世紀初頭から中葉にかけてのドイツの神学者達だったのである。しかしこうして西欧精神に生じた空虚は、まだみだされてはいない。我が国の場合、異種文明との接触の結果は、自己への伝統の否定であり、しかも外国文化から心の真の支えを摂取することもせず、こうして自己を見失ってしまったように思われる。ドイツ（一般に西欧）の場合は、他宗教との接触の結果は、若干の例外はあるにしても、無視という形での閉鎖性であった。しかも自己の内容は充実しているわけではないのだ。ここで必要なのは、異種文化と稔りのある対話が可能な形での自己否定であろう。それは我が国の場合に必要なのが、他の諸文化と対話出来るような形での自己自身を見出し確立することであるのに対応するように思われるのである。

(工学部一般教育等ドイツ語 教授)



原子炉工学研究所長

に就任して

青 木 成 文

去る師走の25日水曜日、研究所教授会を終えてほっとした瞬間、全身から力が抜けて悪感を覚えだしました。それは昨年6月7日に原子炉工学研究所所長に任ぜられて以来、無我夢中のうちに毎日を終り、夕暮れの訪れと共にぐったりしながら、やっと6ヶ月を大過なく送り得た気の緩みで風邪にとりつかれたらしいのです。新春を床の中で迎えているいろいろな思いあぐねてから、やっと自分のペースを掴み、自分らしく務めようと臍を固めてどうやら気負いも無くなり、この半年間各方面の方々に御迷惑を掛けただけで、ひそかな恥か

しさを覚えました。

去年4月半ばに、原子炉研究所所員並びに各部局長による所長候補者の選考において、諸先生方の御推挙により次期所長に推薦されましたときには、歴代所長の輝かしい御業績を前にして、如何にすればその職責を果たすことができるかと、自分の能力を疑い、その重責に不安を持ちながら思案を重ねました。しかし心の解決を見ないうちに6月7日を迎えてしまったのです。その直後に、放射性物質・核燃料物質の取扱施設と管理について、科学技術庁の立入り検査を受け、種々改良改善すべき点を指摘されました。原子力に関して種々の批判が巷間に溢れている現在、大学において原子力を学ぶ者がまず姿勢を正すべきであると考え、諸先生方の貴重な時間を割いて頂いて調査委員会を設け、種々の方策を立て、やっと具体的な対策を実施に移す段階になりました。また原子炉研地帯に実験諸施設を頂いておられ、或は放射性同位元素実験室を共同利用されている理・工学部の各教官の御理解と御協力によって、これからも安んじて放射性物質等を使用できるよう一層の努力を重ねることが、当面の所長の任である

と、自分に言いきかせて今日に至りました。

そもそも原子炉工学研究所は昭和20年代の終りに、全学の教官から選ばれた数名の委員によって、本学に原子力の教育研究をどのような形で導入するかが議論され、その結果、昭和31年に理工学部附置原子炉研究施設が設置され、同39年に本学附置の原子炉工学研究所に昇格し、今日の9部門にまで発展してきました。また原子力教育のため、我が国の最初の一つとして、昭和31年に大学院原子核工学専攻が設置され、学部のない大学院の嚆矢として、今日の総合理工学研究科の先駆となったのであります。本研究所の設立、運営そして原子核工学専攻での教育は、このように全学の協力の下になされてここに20年の歳月を送ってきたのであります。

昭和51年新年度を迎えるに際しましては、原子炉工学研究所の設立の経緯を踏まえ、これまでの本研究所の歩みを反省し、原子力が総合的科学技术の所産である点を考えて、また本学各研究所、理学部、工学部及び

総合理工学研究科の教官と緊密な協力の下に、核分裂核融合などの研究によって、我が国のエネルギー源の健全な開発の在り方とその安全性の確立のために、そして放射性物質の利用による研究成果が真に人類福祉に役立つよう、大学人として本研究所の果すべき役割を深く心に留めて本学の教育研究にお役に立ちたいと願っております。昔の川柳に「貸し家と唐様で書く三代目」というのがありました。専任所長として三代目に当たる私が、その責任を全うしなければ、まさに笑い者になりかねません。願わくば、本研究所所員並びに全学の教官の御理解と御協力によって、これからの2年余が、本研究所の次の発展の礎になれるように微力を尽くしたいと心に期している次第であります。

所長就任以来半年の日々を反省し、また今後の原子力工学研究所並びに本学の原子力研究の発展を期して、ここに皆様の御援助をお願い致しまして、遅ればせながら所長就任の御挨拶と致します。



停年退官にあたって

長い間研究また教育行政にとり組んでこられた教官の方々が本年また何人か停年を迎え退官されることになりました。

広報委員会では、これらの方々に、停年退官をされるにあたっての御感想などを寄せていただきました。これまでは、何かとご苦労もお喜びもあったことでしょう。退官されたあともそれぞれの生き方で、いつまでもお元気に御活躍されることをお祈りします。

なお、退官される方々は次のとおりです。

- | | |
|-------|---------------|
| 国沢 清典 | (理学部情報科学科教授) |
| 桜井 俊男 | (工学部化学工学科教授) |
| 原 伸宜 | (工学部高分子工学科教授) |
| 木暮 正夫 | (工学部経営工学科教授) |
| 山崎 俊雄 | (工学部一般教育等教授) |
| 大木 保男 | (工学部一般教育等教授) |
| 渡辺 英世 | (工学部機械工学科助教授) |
| 金子 正己 | (工学部金属工学科助教授) |



情報科学科

設立当時のこと

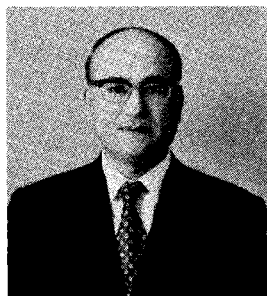
国 沢 清 典

昭和24年5月に東京工大に着任してから、いつの間に年月が流れて、停年を迎えることになりました。私にとって、その間思い出に残ることは幾つかありますが、その中でも情報科学科の創設は忘れることの出来ないものであります。情報科学科の設立は昭和45年度であり、それまで、数学科に所属されていた私の講座が、情報科学科の情報数学講座になり、情報数学講座教授選考委員会が設置されました。この講座の助教授のポストをめぐって数学科とやりとりがあり、当時の学部長の沢田正三先生には随分御世話をかけました。私の情報数学講座教授の配置換えが教授会で了承され、文字通り一人の教官のみよりなる学科が誕生しました。加藤六美学長から情報数学講座担任の通知書を頂いたのが、昭和45年6月10日、主任が委嘱されたのが6月12日であり、文字通り一人でいろいろの会議に出席しなければならなくなり、多忙な学園生活を送る羽目になりました。このようなとき、当時の設立世話人会の

先生方、特に榎本教授にはいろいろ御世話になりました。翌年梅垣教授が情報分析講座教授を担任してからも、この多忙が続き、梅垣教授は随分御苦労だったと思います。

実はこの情報科学科設立の影の功労者の一人に現川上學長を挙げなければなりません。設立に先立つこと10年近い以前から、川上教授、岸源也教授及び私の3人で情報に関する学科創設の案を練り、理学部概算要求に毎年のように出していました。この読みは幸いに適中しました。世の中が情報社会に変貌するにつれ、情報に関する学科設立の気運も強まってきました。情報科学科新設予算通過の報告を受けたときの嬉しさは忘れることが出来ません。御努力頂いた当時の加藤学長、真明局長、沢田学部長には大変感謝している次第であります。

その後本学には、情報工学科が新設されました。もしこれら2つの学科の設立順序が逆の場合だったら、情報科学科は誕生しなかったかもしれません。なぜならば、情報工学科は他の大学にも設立されたので、情報科学科の設立を東京工大のみに許可することは不可能に近いと思います。幸いに、情報科学科が先ず設立され、これが他の国立大学に設立されていない学科であったので、情報工学科の設立には大変苦労されたと思いますが、どうにか成功することが出来たと思います。これは、川上學長の深遠な思慮のたまものだったのか、偶然このような結果になったかはわかりませんが、前者の確率が非常に高かったと信じています。しかし、ともかくも、東京工大は、情報に関する2つの学科を持ち、また長津田に物理情報工学専攻を持ち、今後の名実ともに充実したこの分野での発展を希望してやみません。



感謝とお詫び

桜井俊男

いつの間にか在職35年がたってしまったというのが私の実感です。それほど楽しい工大生活であったともいえます。昭和16年3月以来良い師、良き友に支えられてこの長い年月を本学に過ごさせて頂いたことを心から感謝しますと共に、皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。

この間に本学は輝かしい発展を致しました。昭和16年には新しい学科を含めて学生数は一学年249名であり、全学生数は730名程度でしたから、現在の学部入学者とほぼ同数であったこととなります。現在は、大学院学生を含めて約4,800名となり、量だけでなく質的にも優れた学生を送り出していることは真に喜ばしいことです。これは一つに諸先生方の厳しい教育の賜物であると思います。教育は厳しくなければならない、そして教師と学生との愛情はその厳しさの中で“弟子に弟子入る”気持から生れてくるものと考えております。日本の高度成長に支えられた時代の教育がやゝすると学生を甘やかしたことも事実かも知れません。しかし、これから我が国は従来とは異った産業構造の中に卒業生を送り出していくことになるでしょう。私は本学のような大学には、更に質の高い人材が要求されてくるものと考えます。よく私は学生にいつか来たことですが、“日本は洋服屋のようなものだ。生地を買ってきてデザインし、裁断してミシンを使って製品をつくる。我々は知識と創造性だけが与えられているに過ぎない”と。知識は自ら学ぶものであり、そして与え得るものでしょうが、創造性の涵養こそは今日でも難しい問題として残されています。

本学は戦後和田学長の下に新体制に入り、学科を設けずにコース制が採用され、やがて系学科制に移行しました。当時化学工学系には内田、金丸、永廻、大山、杉野各先生がおられ、本学の新体制づくりに精根をかたむけておられました。更に、最近になって昭和46年に加藤学長の下に現川上學長を委員長とする長津田地区利用委員会が発足し、現学長の下に飛躍的発展が行われてきており、それが着々と実を結びつつあることは真に喜ばしいことです。諸先生方には公私共にお世話になり、ここに厚く御礼申し上げます。

顧みますと、私は恩師田中芳雄先生から卒業研究として“低級オレフィンの重合による潤滑油の合成”という題を頂きましたが、この問題は方法論こそ変わっても今だに生きている問題です。先生の先見性と慧眼には今も私淑しております。それ以後今日までトライボロジーの研究に従事し、少しは内外で知って頂けるようになり、昨年は約80名の外国人の参加を得て国際会議を成功裡に行うことが出来ました。これもすべて私が本学に在職しますことと、先生方のご援助によるものであり、深く感謝しております。

本学も創立80年記念事業を正に終ろうとしています。そして、更に100年記念事業を意義あるものにするように川上學長をはじめとして計画されております。その時には新構想の総合理工学研究科の輝かしい成果を踏まえて充実した記念事業が盛大に行われることを心から願っております。

終りに皆様の御健康と、東京工大の限りない発展を願って退官の御挨拶と致します。



《 今 は 昔 》

原 伸 宜

私は昭和14年に本学の応用化学科を卒業し、それ以来37年もの永い間本学に御厄介になりました。学生時代を入れると実に40年間で、今までの人生の三分の二を大岡山で過したことになります。まさに昭和の激動期に当り、戦争や大学紛争などの苦しい時期もありましたが、幸い良き師や先輩、すぐれた同僚や門下生に恵まれ、大半の期間は楽しく研究生活を送らせて頂き、心から感謝しております。この間、学内の皆様方には大変お世話になり、また御迷惑をかけたかと思いますが、この機に厚く御礼とお詫びを申し上げます。

後暫らくでこの大学を去るというのに、無精な私はまだ研究室の身の回りの整理には全く手がかず、学生達と最後の遊び相手をするのに忙しい有様です。いま改めて研究室の中を眺めてみますと、科学研究費などで購入した新しい種々の装置類が並んでいるかと思えば、また棚の上には私が学生時代に卒業研究で使ったまま、何十年か手も触れたことがない恩師から引継いだ旧式の器具類や、便利な電卓の出現でお払い箱になった一昔前の大げさな電動式計算機と、更にその一昔前の手動式計算機などが乱雑に埃にまみれており、永い研究室の歴史の跡を見るようです。

ふとこの棚の隅に見覚えのある文箱を見付け、埃を払ってあけてみますと、古い大学の辞令が出てきました。菊の御紋のスカシ入りの2枚の厚紙に、内閣総理大臣東條英機宣の名で「任東京工業大学助教授」「叙高等官七等」、宮内大臣松平恒雄宣の名で「叙従七位」と墨で太々と書いてあります。東條氏が「宣」した日付は昭和18年11月で、私が大学を卒業して4年半、27才の時に貰った辞令でした。いま考えますと随分早く昇任されたように思えますが、1年後輩の浅枝先生や渡辺先生、2年後輩の岡崎先生らとほとんど同時期に助教授となり、当時としてはごく普通でした。その頃京大では学部卒業後2年で助教授になった人が多く、同期卒業の京大助教授から「工大は昇任が遅いね」と言われた助教授インフレ時代を思い出します。

任官の辞令には「本俸十二級俸下賜、職務俸九拾円下賜」という如何にも時代を感じさせる文部省伝達がついていますが、職務俸とは年俸に対する加俸で、初めて月給換算87円50銭が助教授の初任給でした。私の

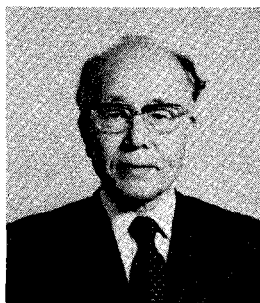
研究室で最初に戦時特令による特別研究生となった池辺清君（現大協石油常務取締役・工博）は、文部省より月額90円の奨学金を受け、この門下生の月収を追越すのに半年かかりました。

私が助手や助教授になった頃の大学の研究費は、研究室当たり確か年額4,000円位で、貨幣価値から換算しますと三十数年後の現在よりも遙かに多く、その上私は戦時中陸軍の委託研究で毎年3万円の研究費を交付されていました。今の3,000万円以上に当りましょうか、ともかく物資不足の当時では研究費が使い切れず、ガラス器具は「見はからい」で取揃えさせてトラック1台分ずつ買だめし、倉庫に保管していたことを覚えています。戦前から戦時中の方が、却って研究費も豊富で贅沢に研究ができたのは、まるで時代が逆行しているような感が致します。

現在の大学では優秀な頭脳を持ちながら、研究費が足りないため真価を発揮できない若い研究者が少なくありません。政府はせめて戦前並みの研究費を大学に支出し、資源やエネルギーの乏しい我が国の科学技術を一段と向上させるべきだと痛感する次第です。

偶然古い辞令を見付け、つい今は昔の思い出話ばかりになりましたが、これも歳のせいとお許し願います。終りに改めて皆様方の永年の御好意に対して厚く御礼申し上げます。

経営工学と私



木 暮 正 夫

昭和22年、本学にお世話になりはじめて以来、29年余が夢のように過ぎ去りました。その間、経営工学科の育成に当って、何かと皆様の御好意に甘え、あるいは御迷惑を御掛けしたと存じます。誠に有難うございました。厚く御礼申し上げますと共に御詫び申し上げます。

私は工大の多くの先生方とは多少経歴を異にし、昭和14年、本学機械工学科を卒業後、ある工作機械メーカーに就職して、終戦まで生産技術や検査、製造現場主任など、主として製造関係のラインやスタッフの仕事をして参りました。昭和21年秋に恩師佐々木重雄先生のお薦めにより、非常勤講師として「生産管理」――

最初は機械工学コース向けの——の講義をお引受けしたのが本学に戻る機縁となり、昭和22年春以来経営工学教室の一員として今日に至りました。

本学に奉職するまでの8年間の戦前、戦中、終戦直後の激動期を通じての会社生活は、私にとっては、経営工学の教育と研究に掛け替えのない経験を与えて呉れたわけですが、更にその間に、切削作業の標準化の必要性に迫られて手を着けはじめた超硬工具の寿命に関する研究が、その後の10余年にわたる私のライフ・ワークの一つとなり、また私の経営工学に関する研究の目を開かせて、科学的管理の祖といわれるF.W. Taylorの後を追う形で、切削条件の最適化研究→管理手法研究→経営組織研究へと、研究領域の拡大と発展に私を駆り立てた次第です。

昭和20年代～30年代前半は、本学の経営工学教育はまだ創成期にあり、本学内外を問わず、経営工学への関心が一部を除いて極めて低い時代であったため、コース選択制度の故もあって、年々の履修学生数がばらつき、卒業式に列席する卒業生数より先生の数の方が遙かに多かったという時期もあり、学生の就職に際しても会社側に経営工学に対する認識がなく、機械や化工出身の学生と同じ入社試験を課されるということもありました。人事や予算面においても学内の基盤が弱くて、少し大袈裟に言えば、系や学部などの組織再編成の話が出る度に、経営工学が台風の目となり、われわれ教授会構成メンバーが経営工学の砦を守るために一致結束したことも、一再ならずありました。

このように種々の曲折もありましたが、一方では本学の学科制度復活に伴い、経営工学科が設置された後昭和30年代後半に至り、2講座の増設、大学院経営工学専攻の設置等もあって、教官も逐次増員された結果、制度的にも次第に安定し、漸く一人前の経営工学科に育ち上って参りました。そして最近では長津田キャンパスにおけるシステム科学専攻設置に主役の一端を担うなど、伝統ある他の諸学科と並んで本学の発展に寄与できる力を備えるに至りました。このような経営工学科の今日の成長振りは、本学経営工学コース発足の初期からその一員となり、創成の苦しみと開花の喜びとを併せ持つ機会を与えられた私に取って、誠に嬉しい限りであり、また感慨無量なものがあります。

なお、長津田といえば、上記のシステム科学専攻の他、精密機械システム、電子システムなど、システム系の諸専攻の設置に、蔭の力として御世話の旗振りをさせて戴けたことも、私に取って本学の生活における生涯の思い出の一つとなることでしょう。

終りに、システム科学専攻設置後の新しい経営工学科を含む東京工大の今後の御発展と、皆様の御多幸を祈って止みません。



回顧と希望

山崎俊雄

本学に私が就職したのは敗戦の前年。その4年前に本学卒業の私は専攻外のことを研究したくても就職統制で許可にならなかった。そこで技術者団体や出版社の編集を手伝いながら独学した。

編集を通じてル・シャトゥリエ実験論の邦訳者、本学の故稲村耕男助教授を知った。植村 琢教授とともに「科学ペン」後身誌を編集された。その紹介で本学助手となった私は無機化学教室で分光分析を手伝ったが、すぐ軍隊に召集された。

戦後、稲村助教授と私は植村教授宅に御厄介になった。稲村助教授は和田小六学長のもとでの改革の先頭に立ち、職員各層の支持を得て民主化に尽力された。その改革の一つが全国旧制工科大学に率先して本学が帯広い人文教育を採用したことである。

言語学の小林英夫教授、心理学の宮城音弥教授、文化史の加藤儀一教授、田中実講師。いずれも稲村助教授の編集による知己かその紹介者である。この3教授によって本学人文系の人脈が形成されていった。

新制大学となり私は文化史所属の助手となった。やがて加藤教授は小樽商科大学長に選ばれた。残った田中講師と私は科学史・技術史の研究を細々と続けた。

技術史の講義を私が担当したのは1962年からである。経済学の阿部統教授の奔走により、本学教養科目に日本最初の技術史という名称が正式に許可された。社会学の永井道雄教授も喜んでくれた。

その後の改革によって、多くの大学、さまざまの学部で技術史を教養・専門科目に置くようになった。多くの大学から非常勤講師を依頼され、私はいま疲れている。停年を機会に講義をやめ、研究と著作に専念したいところである。

ところがその後、広島大学では教養部が総合科学部に再編され、技術史はドクター・コースまで予定されることとなった。浅学な私が招かれ4月から赴任する。もういちど初心にかえらざるを得ない立場にある。

本学を去るに当たっての楽しみは、皆様の理解により、数人の後継者が現われたことである。30才前後の助手、研究生がすでに各大学最初の技術史専任講師あるいは海外留学生となった。調査機関や出版社で活躍している人もいる。

最後に本学への希望をふたつのべたい。一つは本学図書館に故田丸節郎教授、植村琢教授が収集保存された内外学協会誌の創刊以来のコレクションである。国際的にも国内的にも貴重な資料であり、集中された科学史・技術史研究の無限の宝庫である。この宝を活用して大いにその研究者を育成していただきたい。

もう一つは厚生施設の拡大である。本学生協理事長を十年つとめて痛感したのは職員厚生施設と学生関係施設の貧弱なことである。人間性復活のために、これらの施設が研究室・教室と比肩するくらいの比重を占めるよう考慮していただきたい。



退官にあたって

大 木 保 男

私が本学の教壇に立ったのは、昭和38年4月でした。それは、保健担当の浦本先生が停年退官されたので、非常勤講師として保健を講義することになったからです。そして、同年11月1日、労働省から文部省へ出向し、本学の教官になりましたので、つごう13年間お世話になったことになります。

私の専門は産業・労働衛生ですが、労働省での15年にわたる労働衛生行政を通じて、日本の労働衛生を向上させるためには、企業の生産技術を担当する若い層、特に将来この面の指導者になる理工系の大学生に産業・労働衛生の知識を教育することが最大の要件であるとの考えに到達していましたので、喜びと期待を抱いて教壇に立ちました。

このようなわけで、浅学非才ではありましたが、先生方のご理解・ご支援と学生諸君のこの面への関心に支えられて、教育・研究生活を続けることができました。

講義を担当して2、3年たったころ、三浦豊彦博士(労働科学研究所)が「労働の科学」誌上に、「東京工大は、東京高工時代に他に先がけて工場衛生を学生に教えていたが、大学に昇格するとこの講義は消滅したようである。」と指摘されたので、早速、図書館で大学の年誌を調べたところ、まさにそのとおりでした。私は、本学の先輩の高い識見に感動するとともに、今それを保健の講義で復活していることに誇りを感じ、ますます本学への愛着を覚えました。

昭和44年、本学も大学紛争の渦に巻き込まれましたが、その收拾に当って、ふだんあまり交渉のない先生方や職員の方々と真剣に話し合う機会にめぐまれ、多くの知己を得ることができましたし、また連帯感を強めました。大学紛争は不幸な事件ではありましたが、一面、教職員間や学生との意志の交流に役立ったことと思います。

保健体育の施設は、皆様方のご支援によって、トレーニングセンターと保健管理センターが設けられました。その内容の充実については、これに従事する教職員の努力が要請されますが、一面、皆様方のご指導・ご支援がなくては達成できません。よろしくお願いいたします。

私は、4月1日をもって本学を去りますが、皆様方への感謝、本学に対する愛着心、本学の教官であったことの誇りを失わないでしょう。

皆様方のご健康と、大学の発展を祈ります。

ほんとうに、ありがとうございました。



工大との別れ

聖書との出会い

渡 辺 英 世

世界のそして永遠のベストセラーであるキリスト教の聖書はバイブルと云われるだけでなく、テストメント(Testament)とも云われている。テストメントとは遺言の意味ですので停年退職に際して、この本と私との関係を考えて見たいとなりました。

“キリスト教思想が解らない人間は真の科学や工学の研究者にはなれない”とよく云っておられたのは本学の資源化学研究所の創立者加藤与五郎先生でした。

又、私の母親がミッションスクール出であった関係上、聖書の中の有名な言葉は、子供心に時たま聞かされたものでした。

然し、ヨーロッパを中心として発生した近代科学技術、及び各種の近代思想と、その成果の上に立った現代文明の背景に、キリスト教思想が大きな役割りを果たしており、この思想の発生の経過と発展を理解する事なしに現代の世界の動き、又自己の未来の方向を正しく理解し、発見する事は出来ないと思い始めて、聖書を真剣に読み出したのは大学紛争の起る数年前の事で

した。

その頃、私の研究はその一部はすでに実験室的段階は終了し、初期工業化段階に入っており、その技術に基づいた製品が市場に出て数年になり、社会的試練に直面し、その持つ可能性と限界が具体的に明らかになって来た頃でした。

物事が一つの壁に来た時によく“原点に帰れ”と云われますが、私の場合は、問題意識は具体的でしたが、帰って来た原点は思想であり、その中でも特に、キリスト教思想発生の原点をさぐる事でした。

そこへ突然出て来たものが例の大学紛争でした。この事件には私は外見的には教官側に立って、心情的には自己の中年時代に直面した一回しか起り得ない事件を冷静に観察し体験したい気持で積極的に、学生側にも教官側にも働きかけて行ったのでした。今になって考えて見ると、その頃、教育と研究との間に迷いのあった自分に整理が付き、社会性のある研究成果への行動のみが、教育にも独創性が発揮出来るものと考え様になったのでした。

又、紛争は、私の聖書の読み方、感じ方を変えて行きました。それは4福音書から、旧約へと移り身につまされる思いになって行ったのでした。

新しい思想が頭に入ってきて、それが骨肉化し、それに触発されて新しい行動なり具体的なアイディアが生れて来るには時間がかかるものです。私の場合意外な所からアイディアのヒントが得られ、行きずまっていた装置の欠点、製品の弱点を改良する事が出来たのです。この事により、各国のpatentを取り直す事が出来、又この技術が海外へも出て行く事が出来たのでした。

それにつけても思い出されるのはロマ書第5章2節の言葉“私たちは、信仰により、義とされたのであるから、神に対して、平和を得ている。又私達は神の栄光にあずかる希望を持って喜んでいる。なぜなら患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す事を知っているからである。そして希望は失望に終る事はない”云々、これは私の長年にわたって好きな言葉の一つで30年近い研究開発生活を貫いている気持です。

叙 位 叙 勲

去る1月8日に死去されました元本学厚生課長秋元祥吉氏は、従五位・正五位に叙せられ、勲五等雙光旭日章を授与され、1月27日には特旨ヲ以テ位一級追陞せられましたので、お知らせいたします。

編 集 後 記

- ◇ 停年御退官になられる諸先生方から寄書をいただきました。ありがとうございました。
- ◇ 入学試験、論文発表会等も無事終了、今年度の卒業生を送り出すことになりました。厳しい社会情勢のもと大いに活躍されることを祈ります。

東京工大クロニクル No. 79

昭和51年3月25日

東京工業大学広報委員会 発行

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032
